



| | |
|------------------|---|
| Title | ソビエト社会における階級と社会移動 |
| Author(s) | 渡辺, 良智; Watanabe, Yoshitomo |
| Citation | スラヴ研究, 33, 75-98 |
| Issue Date | 1986 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/5157 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | KJ00000113259.pdf |



ソビエト社会における階級と社会移動

渡 辺 良 智

1. はじめに

1917年のロシア革命からすでに半世紀以上が経過し、ソビエト連邦は発達した社会主義の段階にはいったといわれているが、ロシア革命の理念は実現したのであろうか。すなわち、資本主義社会における資本家と労働者との不平等な社会関係、経済的搾取、政治的抑圧などの廃絶が、そしてより平等な社会の実現が、社会主義革命の大きな目標であったと考えられるが、それは実現したのであろうか。

この間にたいしては二つの全く異なる答えがきかれる。

労働者と農民の革命によって、生産手段は国有化され農業は集団化されて、ロシアでは特権的集団も、資本家や地主といった資本主義社会の搾取階級も消滅した。また、教育、医療、公共サービスの完備、そして社会福祉の充実、これらにより国民の生活水準は向上した。資本主義社会と比べて社会主義社会の方がより平等な社会であり、将来の階級のない社会（共産主義社会）へ向かって前進しているというのが第一の答えである。

その一方で、つぎのような答えもある。たしかにロシアでは旧い支配階級は革命によって消滅したが、新しい支配階級やエリートが発生して、ソビエト社会の状態は平等な社会から隔たっているという主張である。例えば、ソ連における工業化や農業集団化と資本主義的所有の廃絶が階級のない社会をうむというのは幻想であって、党官僚または政治官僚という「新しい階級」がうまれて、より大きな収入や特権を享受している¹⁾とか、ソビエト社会の支配階級は「ノームクラツラ」とよばれる「管理者」階級である²⁾とか、ソ連は平等主義社会でなく、ソ連のエリートは大衆とかけ離れた特権をもっている³⁾とかいわれている。

いずれの答えが正しいかは即断できないので、ソビエト社会学の研究成果を利用して検討してみたいというのが本稿の意図である。ソビエトにおいて社会学は1920年代末からほぼ30年間ブルジョア科学として公式にその存在が認められなかったが、1950年代末の復活後はソビエト社会の管理に有用な情報を入手するために社会調査が奨励され、多様なテーマが追求されている。労働、家族、社会意識、世論、マス・コミュニケーションなどとともに階級や社会構造も重要なテーマであり、ソビエト各地で調査が行われている。これらの成果を検討することにより前述の疑問にたいする示唆がえられるであろう。

- 1) Djilas M. *The New Class: An Analysis of the Communist System*, 1957. 原子林二郎訳『新しい階級』時事通信社、1957年。
- 2) Voslensky M. S. *Nomenklatura-Die herrschende Klasse der Sowjetunion*, 1980. 佐久間穆・船戸満之訳『ノームクラツラ』中央公論社、1981年。
- 3) Matthews M. *Privilege in the Soviet Union*, 1982. 木村汎監訳『ソ連における特権』日本工業新聞社、1983。

2. 階級と階層

ソビエトにおいて階級に関する議論がなされる際にまず引合いに出されるのは、B・レーニンのつぎの定義である。

「階級とよばれるのは、歴史的に規定された社会的生産の体制のなかでしめるその地位が、生産手段にたいするその関係（その大部分は法律によって確認され、成文化されている）が、社会的労働組織のなかでの役割が、したがって彼らが自由にしうる社会的富の分け前をうけとる方法と大きさが、他とちがう人の大きな集団である。階級とは、一定の社会的生産の体制における地位が異なることによって、他人の労働を自分のものとすることができるような人の集団である。」¹⁾

この定義の核心にあるのは、人びとの生産手段にたいする関係であり、生産手段の所有関係が階級を区分する基準と考えられている。生産手段にたいする関係からさらに社会的労働組織のなかでの役割や生産物の分配における差異が生じて、その結果ある階級による他の階級の搾取も生じてくるのである。そこで人びとの生産手段にたいする所有関係が変わることによってある社会の階級状況も変わると考えられる。資本主義社会における生産手段の私的所有を廃止して、生産手段の国家（全人民）的所有と協同組合的所有とに変わった、社会主義社会の階級は資本主義社会のそれとは全く異なっていると考えられる。

現代のソビエトで階級に関する典型的な規定がみられるのは、ソビエト社会主義共和国連邦憲法であろう。その中の該当箇所を取り上げてみると、前文はつぎのように述べている。

「ロシアの労働者と農民が遂行した大十月社会主義革命は、資本家と地主の権力を打倒し、抑圧の鉄鎖を断ち切り、プロレタリアート独裁を樹立し、…ソビエト国家を創設した。…

ソビエト権力はもっとも根底的な社会的、経済的改造を実現し、人間による人間の搾取、階級的反目および民族的敵意を永久に根絶した。…

ソ連邦には発達した社会主義社会が建設された。…それは成熟した社会主義的な社会諸関係であり、…すべての階級および社会層の接近…がみられる。…

ソビエト国家の最高の目的は、…階級のない共産主義社会の建設である。」²⁾

また第19条にはこう書かれている。

「ソ連邦の社会的基礎をなすのは、労働者、農民およびインテリゲンツィアのゆるぎない同盟である。

国家は、社会の社会的等質性の強化、すなわち階級的差異、都市と農村および精神的労働と肉体的労働のあいだの本質的差異の払拭ならびにソ連邦のすべての民族の全面的な発展および接近を助成する。」³⁾

ソビエト連邦の憲法の規定は、ソビエト社会の現実を正確に反映しているというよりも、

1) Ленин В. И. Полн. собр. соч., т. 39. с. 15. 『レーニン全集』第29巻, 大月書店, 425頁。

2) 藤田勇ほか『ソビエト法概論』有斐閣, 1983年, 270-71頁。

3) 同書274頁。

ソビエト社会における階級と社会移動

ソビエトの政治の理想を示したという性格の強いものであることは言うまでもないが、ソビエトにおいて階級の問題が重視されており、さらに第19条に規定されているように社会的等質性の強化、そして階級のない共産主義社会の建設がソビエト国家の重要な目的であることは認められよう。

ソビエト連邦の憲法に出てくる階級は、労働者とコルホーズ農民であり、その他にインテリゲンツィア階層にも言及されている。労働者とコルホーズ農民といった2大階級の区分は、生産手段の所有形態の相違に基づくものであるが、インテリゲンツィア階層は、別の基準で区別されている。インテリゲンツィアは生産手段にたいする関係からいえば労働者と同じであるが、社会的労働組織における役割が異なることによって、労働者と区別されている。肉体労働と精神労働という労働の性質によって区別されているのである。ところが、同じ農業に従事している者は、労働の性質ではなく生産手段にたいする関係から、コルホーズに所属している者はコルホーズ農民に、ソフホーズに所属している者は労働者に区別されている。こういった問題点はあるものの、労働者とコルホーズ農民を肉体労働に従事する者、インテリゲンツィアを精神労働に従事する者、と規定しておけば、一応筋道が通る。

つぎにソビエト社会の階級構成に関する公式統計を参照してみると、労働者、勤務員（ホワイトカラー）、コルホーズ農民・協同組合的職人、独立農民・自営職人、といった区分が採用されている。階級構成の歴史の変遷をみるために1939年と81年とを比較すれば、労働者が33.7%から60.5%へ増加し、勤務員も16.5%から25.7%へ増加しているのにたいして、コルホーズ農民・協同組合的職人は47.2%から13.8%へ大きく減少し、独立農民・自営職人は2.6%から0%へ変化している¹⁾。このようにソビエト社会の階級構成は、コルホーズ農民の減少、労働者と勤務員の増加、といった方向へ変化しているわけである。この趨勢が続けば、将来コルホーズ農民は消滅してしまい、全国民は労働者か勤務員に所属することになると予想されるが、果してこれが社会的等質性の増大の意味するところであろうか。

この統計では勤務員といった階層がソビエト社会の階級構成の重要な構成分子と認められているが、ここでも肉体労働と精神労働という労働の性質によって労働者と勤務員とが区別されている。精神労働に従事する者を、勤務員ないしはインテリゲンツィアと呼んで、肉体労働に従事する労働者と区別するのは、生産手段にたいする関係だけではソビエト社会の階級構成を説明し尽せないといった事情があるからだと思われる。

精神労働従事者をどう呼ぶかは論者によって異なるが、大体ホワイトカラー全体をさす用語が勤務員であり、インテリゲンツィアないしは専門家と呼ばれるのは、中等専門教育以上の学歴のあるホワイトカラーである。このように考えれば、精神労働従事者は二種類となり、肉体労働従事者は労働者とコルホーズ農民の二種類であり、合わせて四つの階級、階層が区分されることとなる。このような区分がソビエトの階級に関する文献の中で広く採用されている。

これらの階級、階層間の関係についてはつぎのように説明されている。

「ソビエト社会には生産手段を独占的に所有する階級も全く奪われている階級もない。

1) Народное хозяйство СССР в 1980 г., М. Статистика, 1981, с. 9.

すべての階級と階層は生産手段の平等な所有者であり、より大きな権利と利潤を所有する社会集団もない。すべての生産手段は社会的所有であり、このことにより、人間による人間の搾取の手段となりえず、ある集団の他集団にたいする特権や支配の手段となりえない。

それ故に階級間の関係は支配と服従の関係でなく、物質的および精神的富の生産と分配において平等と協力の関係に変わっている。¹⁾

ところで、階級と階層との異同についていえば、ソビエトでは階層とは、階級内の労働の性質を同じくする人びとの集団と考えられていて、主としてインテリゲンツィアや勤務員をさしている。西側の社会学で用いられている「社会階層」とは考え方が異なるのである。後者についていえば、職業、所得額、学歴、人びとによる格付け、生活様式などの指標によって、社会的地位の序列体系においてほぼ同じレベルの個人をまとめてある階層とよぶのである。そして両者の関連についていえば、「階級は常に社会闘争の動態とその構造的根源を分析するための範疇であり、そのようなものであるがゆえに、ある一時点におけるヒエラルキー体系を記述するための範疇としての階層とは厳密に区別せねばならない²⁾」のであるが、西側の社会学者の議論でも両者はしばしば混同されている。

ソビエト社会が所得、権力、威信などのヒエラルキーによって階層化されているといった見解はソビエト社会学者からはブルジョア・イデオロギーと見做されているので、ソビエト社会の階層構造を直接的に分析している研究はまだみられない。それでも労働者階級、コルホーズ農民階級のより細かな区分を提唱している研究はいくつかみられる。

労働者階級についてはレニングラードの機械製造工場従業員に関する O・シカラタンの調査をみると、肉体労働従事者で4範疇、精神労働従事者で4範疇が区分されている。すなわち、肉体労働従事者では、非熟練肉体労働者（補助労働者）、機械つきの熟練労働者（打出工、電気工）、熟練手労働労働者（仕上工、組立工）、精神労働と肉体労働を兼ねる高度熟練労働者（機械技師、調整工）が区分される。また精神労働従事者は、半熟練非肉体労働従事者（検査工、仕分け工、事務員）、熟練精神労働者（工芸技術家、簿記係）、高度熟練科学技術労働者（設計者）、生産集団指導者（工場長、部門長）と区分できる。これらの職種集団（階層）は学歴、熟練度、賃金、さらには生産合理化運動参加度、党員性、社会活動参加度などにおいても差異が認められる（表1）。調査時点と同じ頃の1965年の統計によれば、生産企業の月平均賃金は労働者101.7ルーブリ、技術労働者（ИТР）148.4ルーブリ、職員85.8ルーブリで、最大格差は1.7倍であるが、当該工場の場合2倍を超えており、学歴においても2倍以上の格差がある³⁾。これらの事実について彼は別の著書でこう説明している。

「私たちの社会における社会的差異は社会主義的所有の異なる形態のみならず、社会的経済的労働の非同質性と関連している。それは働き手の集団の事実としての不平等の基礎をなす。彼らは労働の性質において社会にたいして異なる貢献をなし、それ故に賃金もま

1) Осипов Г. В. (ред.) Социология в СССР, т. I. М. Мысль, с. 340.

2) Dahrendorf R. Class and Class Conflict in Industrial Society, 1959. 富永健一訳『産業社会における階級および階級闘争』ダイヤモンド社、1964年、107頁。

3) Шкаратан О. И. Социальная структура советского рабочего класса, Вопросы Философии, 1967, №. 1, с. 36.

ソビエト社会における階級と社会移動

表1 工場労働者の階層

| 階層 | 指標 | 学歴 (年) | 熟練 | 賃金 (ルーブル) | 在職 年数 | 合理化運動 参加(%) a | 党員 (%) b | 社会活動 参加(%) | 年齢 (歳) |
|----------------------|----|-----------|-----|--------------|----------|------------------|--------------|---------------|-----------|
| 生産集団組織者 | | 13.6 | - | 172.9 | 17.0 | 27.1 43.1 | 54.4 6.4 | 84.2 | 41.8 |
| 高度熟練科学技術労働者 | | 14.0 | - | 127.0 | 13.5 | 10.3 35.4 | 19.8 20.4 | 70.4 | 35.7 |
| 熟練精神労働者 | | 12.5 | - | 109.8 | 14.0 | 13.1 23.3 | 19.6 23.2 | 82.4 | 36.8 |
| 精神労働と肉体労働を兼ねる高度熟練労働者 | | 8.8 | 4.8 | 129.0 | 15.5 | 15.6 54.8 | 24.3 14.2 | 79.2 | 35.3 |
| 熟練肉体手労働労働者 | | 8.3 | 3.9 | 120.0 | 13.5 | 10.8 34.7 | 16.2 21.2 | 60.7 | 39.1 |
| 機械つきの熟練肉体労働者 | | 8.2 | 3.2 | 107.5 | 11.4 | 4.6 20.8 | 12.2 27.3 | 54.3 | 35.7 |
| 半熟練非肉体労働者 | | 9.1 | - | 83.6 | 14.1 | 3.1 12.0 | 7.8 19.3 | 54.5 | 32.3 |
| 非熟練肉体労働者 | | 6.5 | 3.0 | 97.5 | 14.5 | 0.9 9.1 | 3.7 10.1 | 35.1 | 39.2 |

(注) a: 上欄は常時参加する者下欄は時々参加する者。

b: 上欄は共産党員, 下欄はコムソモール員。

(出所) Шкаратан, О. И. Указ. соч., с. 36.

た異なる。社会的職業的階層の基本的指標は社会的分業状態から生ずる労働活動のタイプであり、職業、熟練度、管理への参加度である。階層は教育水準、社会的政治的活動性、技術的創造活動への参加度、類似した労働と生活の条件、所得、日常生活の特徴、これらの類似する働き手を統合する。¹⁾

このような発想は、西側社会学者のいう社会階層と大差はない。さらに彼は社会的職業的地位と社会的出身(階級, 地域)が関連をもち、働き手の社会的職業的地位決定に学歴が重要な要因であると主張している²⁾。

農村の状況については Ю・アルチュエーニャンの研究³⁾が注目される。彼は労働者、勤務員、コルホーズ農民といった形式的な階級区分は現実的でないし、階級間差異よりも階級内差異が目立ち生産手段の所有関係において平等な人びともその利用の過程で分けられるという。労働の性質によって職種・熟練度グループに分けることが有効だと彼は考えてインテリゲンツィア、勤務員、熟練肉体労働者、非熟練肉体労働者と区分して、ウクライナの農村の状況を分析した。これらの区分以外に所属部門により、国家部門(ソフホーズや住民サービス企業)、コルホーズ部門とを分けた。一人当り月平均賃金で比較すると、二つの部門のうち国家部門の方が高かった。だが部門間の差異よりも部門内の職種間の所得格差の方が顕著であった。最も高給の熟練労働者は最も低い給料の労働者の6,7倍もの支払いを受けていた。また第二次大戦前と比較すると、コルホーズ生産の拡張、コルホーズ

1) Бляхман Л. С., Шкаратан О. И. НТР, рабочий класс, интеллигенция, М. Политиздат, 1973, с. 195-96.

2) Шкаратан, Указ, соч. с. 37.

3) Арутюнян Ю. В. Опыт социологического изучения села, М. МГУ, 1968. なお中山弘正「ソ連邦における農村実態研究(1)」『明治学院論叢』(経済研究)31号, 1970年も参照した。

内分業の深化とともに職種・熟練の格差は強まっていた。さらに農村生活の文化的側面と関連する教育の点でも階層格差が著しかった。熟練精神労働従事者と非熟練肉体労働従事者の学歴を比較すると国家部門で12年と5年、コルホーズ部門で8.2年と3.8年といった開きがあった。彼によれば、教育の差は緩和せず、逆に社会的格差をより一層強めており、この基盤の上に職種・熟練水準が横たわっている。さらに彼はソビエト社会における教育の重要性についてつぎのように述べている。

「私有財産でなく、国家によって評価されるどころの資格が社会における人間の地位を規定するわが国のような条件のもとでは、教育は特別な社会的意義をもつ。」¹⁾

彼はその後の農村社会の研究²⁾でも階層を取上げている。社会主義の下でどうして社会集団間の差異が生ずるかといえば、生産手段の所有においては平等であっても、その管理、利用の側面において格差が生じるのである。資本主義社会では生産手段の所有が個人の社会的地位を規定し、それが労働を規定するという連関があるとすれば、社会主義社会では労働が社会的地位を規定し、さらに所有権の利用度を規定するのである。この際、労働の性質が決め手になるという。所有権の利用度のあらわれは管理・運営への参加である。この参加度を、生産集団の重要な諸問題の決定における影響力を指標として、階層との関連を探ってみると、学歴、賃金と同様に大きな格差があることが判明した。資格・熟練度が高いほど集団の運命への責任感も大きい。さらに彼は教育体系—職種体系—賃金体系—文化体系といった関連³⁾にも注目しており、教育が差異の根底にあると考えられる。

工場と農村社会の階層状況をソビエト社会一般に拡大解釈することは無理であるが、「社会階層論」的アプローチに通ずる研究がソビエトにも出現しつつあることは注目される。また階層を決定する要因としての学歴の重要性も示唆されている。そして地区政治活動⁴⁾、宗教⁵⁾、結婚⁶⁾といった主題の分析の際にも階層との関連が言及されている。ただその階層区分は労働者、コルホーズ農民、勤務員、インテリゲンツィアといった四区分であ

表2 農村の社会階層

| | Г ₃ | Г ₂ | Г ₁ | В | Б | А ₁ | А ₂ | А ₃ | А ₄ |
|-----------|----------------|----------------|----------------|------|------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| 学 歴 (年) | 4.1 | 4.8 | 5.4 | 6.0 | 8.6 | 10.6 | 13.3 | 8.4 | 12.5 |
| 賃 金(ルーブル) | 34.7 | 57.2 | 64.1 | 70.6 | 66.5 | 78.1 | 106.6 | 92.9 | 137.1 |
| 影 響 力 | 0.21 | 0.36 | 0.38 | 0.47 | 0.54 | 0.72 | 0.79 | 0.88 | 1.0 |

(注) 影響力については「集団の重要な諸問題の決定に影響をもっているか」との問に対する解答で、ありを1、なしを0とした平均値を示す。

Г₃: 雑役労働者 Г₂: 非熟練手労働労働者 Г₁: 熟練労働者 В: 機械運転者 Б: 事務員
 А₁: 中等専門教育を受けた専門家 А₂: 高等教育を受けた専門家 А₃: 中間指導者 А₄: 上級指導者

(出所) Арутюнян Ю. В. Социальная структура..., с. 354.

- 1) Там же, с. 60.
- 2) Арутюнян Ю. В. Социальная структура сельского населения СССР, М. Мысль, 1971.
- 3) 中山弘正「ソ連邦農村研究の新潮流」『明治学院論叢』(経済研究) 37号, 1972年, 67頁。
- 4) Спиридонов Л. И., Гилинский Я. И., (ред.) Человек как объект социологического исследования, Л. ЛГУ, 1977.
- 5) Лебедев А. А. Конкретные исследования в атеистической работе, М. Политиздат, 1976.
- 6) Чуйко Л. В. Браки и разводы, М. Статистика, 1975.

ソビエト社会における階級と社会移動

り、やや物足りない感じは否めない。

3. 階層と教育機会

当節ではどのようにして階層による学歴格差が生ずるかについて検討するが、それはまた階層によって中等、高等教育をうける機会の差の結果とも考えられる。

まずソビエトの教育制度を概観しておく、3歳から6歳まで幼稚園、保育園へ通い、7歳から初等学校へ進み、義務教育が始まる。義務教育の年数は以前の8年から1975年に10年に延長され¹⁾、1984年から次第に11年に延長される予定である。しかし8年終了時に進路が分かれている。第一のコースは9年生へ進み、第二のコースは中等専門学校(テフニクム)へ進み、第三のコースは職業技術学校(ПТУ)へ進み、最後のコースは就職である。だが、1975年以降最後の進路をとる者はごく少ない。

8年修了者の進路状況からみていくと、1965年には4割強が就職し、4割が9年へ進み、ПТУとテフニクム進学者を合わせて2割弱であった。1975年には6割が9年へ進み、一般的ПТУへ2割強、中等教育卒業資格の認定されるПТУへ1割、が進み、テフニクム進学者5%、そして就職者は少数と変わった。1980年になるとやはり6割が9年生へ進み、ПТУへ3分の1が進んでいるが、中等教育卒業資格のとれるПТУへ2割弱が進んでいた。テフニクムへは6%が進んでいた²⁾。15年間の変化は、義務教育年数の延長に伴い、就職者が実質的にいなくなったこと、9年生およびПТУ進学者の増加、ПТУのなかでも中等教育を併せて行うタイプへの進学者の増加、である。

このような進路状況と階層が密接に関連していることが多くの調査から報告されている。例えば、レニングラードの調査では、9年進学者の割合はインテリゲンツィアの子弟では86%、半熟練・非熟練労働者、勤務員の子弟では25%、またПТУ進学者と就職者の割合はそれぞれ3%と50%になっていた³⁾。この振り分けがなされる一つ前の段階、すなわ

表3 8年修了者の分布

| 年 | 8年修了者 (千人) | 就 職 者 | 全 日 制 課 程 進 学 者 | | | |
|-------------|---------------|--------------|-----------------|-------------|--------------|-------------|
| | | | 職 業 技 術 学 校 | | 9 年 生 | 中 等 専 門 学 校 |
| | | | 一 般 | 中 等 | | |
| 1965 (%) | 3682 100 | 1564 42.5 | 454 12.3 | - | 1470 40.0 | 194 5.2 |
| 1975 (%) | 4951 100 | 120 2.3 | 1061 21.4 | 506 10.2 | 3005 60.9 | 259 5.2 |
| 1980 (%) | 4149 100 | 17 0.5 | 575 13.8 | 801 19.3 | 2500 60.2 | 256 6.2 |

(出所) Руткевич М. Н. Реформа образования..., с. 24.

- 1) 因みに、1974年のロシア共和国では1年入学者に対する8年修了者の割合は94.9%、10年終了者の割合は45.7%であった。Филиппов Ф. Р. Всеобщее среднее образование в СССР. М. Мысль, 1976, с. 64.
- 2) Руткевич М. Н. Реформа образования, потребности общества, молодежь, Социологические Исследования. 1984, №. 4. с. 24.
- 3) Васильева Э. К. Социально-профессиональный уровень городской молодежи, Л. ЛГУ, 1973, с. 41.

ち8年生の将来の希望状況においても階層格差が認められる。例えば、1968年ニジニ・タギルの8年生の希望は、全体として9年生進学56.1%、テフニクム進学14.2%、ПТУ進学26.2%、就職3.5%と分かれていたが、階層別にみると、労働者、勤務員、専門家の順に、9年生進学は51.8%、43.0%、75.0%、テフニクム進学は13.8%、15.2%、18.7%、ПТУ進学は25.5%、28.2%、2.9%となっていた¹⁾。専門家階層の子弟に高等教育進学コースの9年生進学希望が強烈である。同様の結果が他の調査²⁾でも確認されたが、ホワイトカラーには9年生進学希望者が、労働者、コルホーズ農民にはテフニクム・ПТУ進学希望者が多くなっていた。

つぎに10年生の進路状況を眺めておくと、ВУЗ（大学、高等教育機関）、テフニクム、技術学校（ТУ）、就職といったコースが考えられる。志望段階ではВУЗ進学希望者が目立っているが、実際の結果では、就職した者が最も多く、8年生よりも10年生の方が進学競争は激しくなる。1965年の統計では、ВУЗ進学者、テフニクム進学者がそれぞれ4割強、就職した者が16%であった。1975年には就職した者が55%、ВУЗ進学者とテフニクム進学者がそれぞれ16%、ТУ13%となっていた³⁾。中等教育修了者が大幅に増加した割にはВУЗの収容人数が増加しなかったためか、過半数は就職せざるをえなかった。以前は9年生へ進学することはВУЗ進学のエリートコース進学を意味していたが、義務教育年数の延長により、大衆向けコースとなった。ВУЗを目指したものの希望が叶えられなかった者は、浪人が可能な裕福な家庭の子弟を除いて、就職せざるをえない。だが職業教育を行っていない中等学校卒業だけでは仕事に準備不足である。そこでТУ進学者も出てきた。1980年にはこの傾向がより一層強まり、ТУ進学者が27%、就職者が41%となっていた⁴⁾。ВУЗ進学者とテフニクム進学者の割合は1975年と比べて大差はなかった。ところで、中等学校卒業生数はВУЗ入学定員を1として、1965年に2.4、1975年に4.6、1980年に4.2となっていた⁵⁾。他方、1981年のモスクワにおける調査では10年生の81.3

表4 10年生の分布

| 年 | 卒業生数 (10-11年,千人) | 就職者 | 全日制課程進学者 | | |
|------|---------------------|--------|----------|--------|-------|
| | | | 技術学校 | 中等専門学校 | ВУЗ |
| 1965 | 913 | 147.6 | - | 387 | 378.4 |
| (%) | 100 | 16.2 | - | 42.4 | 41.4 |
| 1975 | 2716 | 1504.5 | 353 | 429.6 | 428.9 |
| (%) | 100 | 55.3 | 12.9 | 16.0 | 15.8 |
| 1980 | 2428 | 1124.2 | 735 | 424.3 | 444.5 |
| (%) | 100 | 41.2 | 26.9 | 15.6 | 16.3 |

(出所) Руткевич М. Н. Указ. соч., с. 24.

- 1) Руткевич М. Н. Филиппов Ф. Р. Социальные перемещения, М. Мысль, 1970. с. 214.
- 2) Руткевич М. Н. Филиппов Ф. Р. (ред.) Высшая школа как фактор изменения социальной структуры развитого социалистического общества, М. Наука, 1978. с. 90.
- 3) 4) Руткевич, Указ. соч., с. 24.
- 5) Там же. なお中等学校卒業生数, ВУЗ入学定員ともに全日制課程についてである。

ソビエト社会における階級と社会移動

表 5 ВУЗ 入学者の社会的出身 (%)

| 階 層 | 人口分布 (1970年) | | 1 年生の社会的出身 (年度) | | | | | |
|---------|--------------|------------|-----------------|---------|---------|---------|---------|---------|
| | 全 国 | スヴェルドロフスク州 | 1969/70 | 1971/72 | 1973/74 | 1975/76 | 1977/78 | 1979/80 |
| 労働者 | 56.7 | 72.7 | 37.1 | 39.8 | 44.4 | 45.5 | 46.5 | 47.3 |
| | | | 38.5 | 47.6 | 49.7 | 49.2 | 56.1 | 55.1 |
| コルホーズ農民 | 20.5 | 3.1 | 8.5 | 9.9 | 6.5 | 7.5 | 6.4 | 6.5 |
| | | | 6.1 | 2.8 | 2.4 | 2.1 | 1.9 | 1.1 |
| 勤 務 員 | 22.6 | 24.1 | 54.4 | 50.3 | 49.1 | 47.0 | 47.1 | 46.2 |
| | | | 55.4 | 49.6 | 47.9 | 48.7 | 42.0 | 43.8 |

(注) 分子は全国, 分母はスヴェルドロフスク州の状態。
(出所) Рубина Л. Я. Советское студенчество, с. 56.

表 6 農村出身学生の割合 (スヴェルドロフスク州, %)

| 大学の種類 | 年 度 | 1969/70 | 1973/74 | 1977/78 | 1981/82 |
|---------|-----|---------|---------|---------|---------|
| 総 合 大 学 | | 14.9 | 12.8 | 10.1 | 10.2 |
| 工 学 部 | | 8.5 | 5.9 | 5.5 | 5.7 |
| 農 学 部 | | 59.7 | 66.3 | 65.1 | 61.2 |
| 医 学 部 | | 15.8 | 31.0 | 23.8 | 21.1 |
| 教 育 学 部 | | 24.0 | 28.7 | 25.3 | 26.7 |
| 全 体 | | 16.1 | 17.5 | 15.9 | 15.1 |

(出所) Рубина Л. Я. Изменение в..., с. 112.

%が ВУЗ 進学を希望して、60%が ВУЗ 全日制課程進学を実現していた。だが、ロシア共和国では10年生の18.9%、ソビエト連邦全体では14.6%だけが全日制過程進学を実現していた¹⁾。このように ВУЗ 進学競争は近年より激しくなる傾向がある。

つぎに ВУЗ 入学者の状況を眺めてみよう。出身階層別には、1969/70年には労働者が37.1%、コルホーズ農民が8.5%、勤務員が54.4%、1979/80年にはそれぞれ47.3%、6.5%、46.2%となっていた²⁾。労働者が増加し、勤務員が減少しているのは、人口分布と入学者の社会的出身との乖離が1970年頃甚しくなったので労働者出身者を増加させる是正策がとられたためである。労働者、コルホーズ農民の子弟などのための大学予備コースが設けられている。労働者よりも一層不利なのがコルホーズ農民の子弟であり、1970年当時よりも1980年頃の方が減少している。農村出身者には、農業技師や農村の教師を養成する農学部や教育学部へ優先入学する途も開かれているが、農村出身者は全体の6分の1以下しか占めていない³⁾。階層格差に居住地域による格差がかさなっているのである。

また1978年のロシア共和国の欧州地域に関する資料では、ВУЗ 入学者の出身階層は、

- 1) Заславский И. Е., Кузьмин В. А., Островская Р. Т. Социальные и профессиональные установки московских школьников, Социологические Исследования, 1983, №. 3. с. 132.
- 2) Рубина Л. Я. Советское студенчество, М. Мысль, 1981, с. 56.
- 3) Рубина Л. Я. Изменения в социальном составе студенчества, Социологические Исследования, №. 3. 1982, с. 112.

労働者 34.9%、コルホーズ農民 9.4%、勤務員 5.7%、専門家 41.1%と分かれていた¹⁾ので、勤務員だけしか示されていない場合でも、インテリゲンツィアの方がホワイトカラーよりも多いと考えておいてよいであろう。

学部別に学生の出身階層の分布を眺めてみると、労働者は工学部、教育学部に、コルホーズ農民は農学部、教育学部に、勤務員は各学部に、専門家は総合大学理科、文科、経済学部、医学部に、進出している²⁾。医学部と総合大学理科には専門家が目立って多く、学生の人気ないしは入学試験の難易を反映しているように思われる。実際、入学試験の成績は、専門家、労働者、勤務員、ソフホーズ労働者、コルホーズ農民の順に低下しており³⁾、医学部と総合大学理科系学部にコルホーズ農民の子弟が入学することは容易でない。学部別に志望動機を尋ねたところ、農学部1年生に「入学試験の競争が容易だったから」という者が他学部1年生よりも目立って多かった⁴⁾ことから窺われる。

BY3 入学試験の成績に典型的にあらわれていたが、階層と学業成績は関連があり、8年生修了後に勤務員、専門家層の進出が著しくなる。8年生の生徒数を1として、10年生、BY3 1年生と5年生のそれぞれの数を調べた結果が、図1である⁵⁾。労働者は10年生で

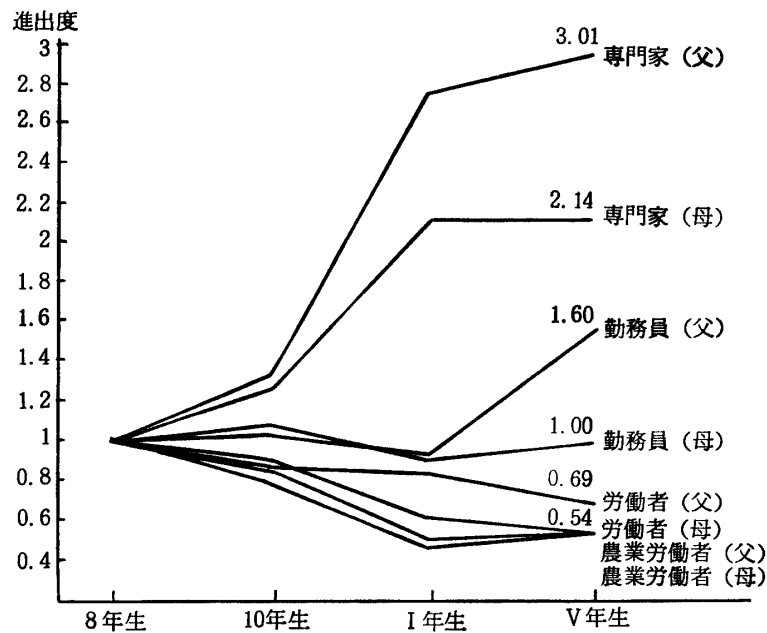


図1 学年ごとの階層別進出度

(出所) Руткевич М. Н., Филиппов Ф. Р. (ред). Указ. соч., с. 114

- 1) 2) Филиппов Ф. Р. и др. (ред.) Формирование социальной однородности социалистического общества, М. Наука, 1981, с. 102.
- 3) Зепа Б. А. Отношение будущих специалистов к развитию культуры личности, в кн: Ашмане М. Е. (ред.) В ысшая школа и социальная структура развитого социалистического общества, Рига, Зинатне, 1981, с. 122.
- 4) Рубина, Указ. соч., 1981. с. 88.
- 5) Руткевич, Филиппов, Указ. соч., с. 112-15.

ソビエト社会における階級と社会移動

0.85, ВУЗ 1年生で0.52, 5年生で0.69, と減少していたが, コルホーズ農民とソフホーズ労働者はそれぞれ0.86, 0.60, 0.54 とさらに減少が目立った。これにたいして勤務員は ВУЗ 1年生で若干減少するものの, 5年生で1.60 となり, 専門家は10年生で1.37, ВУЗ 1年生で2.86, 5年生で3.01 と大幅に進出している。このような学年ごとの階層別進出度は, 子弟の幼児期からの教育機会や意欲, さらには教育環境の相違を反映していると考えられる。

階層による学業成績の相違は初等学校入学段階においてすでに見出されている。幼稚園に通って入学前の準備をした児童は, 親の学歴が高くなるにつれて多くなる。また初等学校教師による準備状態評価では, 平均以上とされた者が, 専門家の子弟で4分の3, 労働者の子弟で5割強, コルホーズ農民の子弟で3割強となっていた¹⁾。

中等学校生徒についていえば, 1970年に全連邦で留年者が130万人, 中途退学者50万人といわれ, 留年者の4分の3, 中途退学者の大部分が男子生徒であったが²⁾, これら成績不良者も家庭の状況と関連していた。親の平均学歴を比較すると一般生徒の父親の平均学歴が8.40年だったのにたいして成績不良者の父親では5.98年と低く, 経済的困難を訴える家庭も成績不良者に目立った。これ以外に父母のいずれかが欠けている欠損家族も一

表 7 階層と進学状況 (1)

| 出身階層 | 進学した8年生の割合と平均点 | |
|----------------------|----------------|--------|
| | 3.5点以下 | 3.5点以上 |
| 専門家(大学卒) (I) | 77% | 89% |
| 専門家(中等専門教育卒) (II) | 50 | 80 |
| 熟練労働者 (III) | 38 | 69 |
| 半熟練・非熟練労働者, 勤務員 (IV) | 19 | 41 |

(出所) Васильева Э. К. Указ. соч., с. 41.

表 8 階層と進学状況 (2)

| 平均点 | 出身階層 | ВУЗ 進学 | テクニックム 進学 | 就職 ПТУ |
|--------|------|--------|-----------|--------|
| 3.5点以下 | I | 40% | 14% | 46% |
| | II | 34 | 11 | 55 |
| | III | 16 | 20 | 64 |
| | IV | 7 | 18 | 75 |
| 3.5点以上 | I | 73 | 3 | 24 |
| | II | 61 | 9 | 30 |
| | III | 44 | 12 | 44 |
| | IV | 21 | 9 | 70 |

(注) 出身階層の記号は表7を参照のこと。

(出所) Васильева Э. К. Указ. соч., с. 42.

1) Там же, с. 81-84.

2) Попов В. Д. Социологические проблемы перехода к всеобщему среднему образованию, Социологические Исследования, 1975. №. 2, с. 88.

般生徒の約2倍であり、過度の飲酒、父母の口論、義父母との関係など教育上好ましくない状況も成績不良グループについて報告されている¹⁾。

階層と進学状況との関連についてはレニングラードの調査結果²⁾が興味深い。8年生を平均点3.5で成績上位グループと下位グループとを分ければ、予想どおり上位グループの方が下位グループよりも進学者が多くなっていた。しかし階層による相違もまた大きかった。上位グループのインテリゲンツィアの子弟では8割以上が進学していたが、半熟練・非熟練労働者、勤務員の子弟では4割だけ進学していた。ところが成績下位グループでもインテリゲンツィアの子弟は上位グループの半熟練・非熟練労働者、勤務員の子弟よりも多く進学していた。10年生においてはBY3進学には8年生よりも学業成績との関連があるものの、インテリゲンツィアの子弟と半熟練・非熟練労働者、勤務員の子弟とを比べると、たとえ成績が悪くても前者の方がBY3進学者が多く、就職者、ПТУ進学者は少なかった。

この調査では階層が同じであれば、欠損家族、多子家族（子ども2人以上）の子弟は不利であることも報告している。また卒業後に勉学を断念して就職した者の理由としては、「BY3の入学試験に不合格」というのが最も多かったが、「自立したかった」に続いて「家庭の経済的困難」が挙げられており³⁾、家庭の経済力もまた無視しえない学歴形成要因である。生徒の将来計画と家庭の経済力が関連していることは別の調査結果⁴⁾からも裏付けられる。たしかにソビエトの学校教育において授業料は無料で奨学金も支給されている。だが奨学金だけでは学生生活を続けられないし、経済的に困難な家庭の子弟は、家計を助けるために就職せざるをえないと考えられる。

これまでの検討からBY3入学競争において最も有利な位置を占めているのは大都市に居住するインテリゲンツィアの子弟であり、反対に最も不利な位置に置かれているのが農村部のコルホーズ農民の子弟であると考えられる。都市部と比べて農村部の中等学校は設備、教師の質ともに劣り、生徒の進学準備に不利である。また農村の生徒はつぎのような恩恵に浴することができない。まず第一に、BY3の大部分は都市にあるが、多数のBY3には有料の入試準備コースが設けられていて、都市の生徒は利用できる。例えば、1969年のレニングラードの調査では、中等学校卒業生の約6割、BY3入学者の3分の2がここで学んでいた。ついで大都市の生徒の有利さがあらわれるのは、多数の中等学校上級生が依頼している「家庭教師(репетитор)」であり、数学や物理の教えをうけていた⁵⁾。

都市の生徒の中でもインテリゲンツィアの子弟が最も有利な位置を占めているのは、1960年代後半にはいってから、生徒の興味に見合った選択コースや、科学、語学、芸術に関して集中的教育を施す専門の学校が設けられたことにもよる。これらの学校は大都市に集中しており、インテリゲンツィアの子弟が生徒の大半を占めていた⁶⁾。そこで集中的に教育されたインテリゲンツィアの子弟がBY3入学競争において他の階層の子弟に勝つこ

1) Там же, с. 84-85.

2) Васильева, Указ. соч., с. 41-42.

3) Там же, с. 43-45.

4) Руткевич, Филиппов, (ред.) Указ. соч., с. 100.

5) Бляхман, Шкаратан, Указ. соч., с. 181.

6) Dobson R. B. Education and opportunity, in Pankhurst J. G. and Sacks M. P. (eds.) Contemporary Soviet Society, N. Y. Praeger, 1980. p. 130.

ソビエト社会における階級と社会移動

とは容易であり、インテリゲンツィアの自己再生産の傾向を生じた。

このような「エリート主義」学校はソビエトの教育の民主主義的原則に反するという意見もあったが、将来専門家として社会に最大限の利益をもたらすような人材を養成する必要があるとの意見もあり、いずれの主張にも一理あって甲乙つけがたかった。

これまでの分析をまとめてみると、つぎのようにいえる。

「ソ連における学歴達成過程は多くの点で西側諸国で観察されているものと類似している。青年の学歴達成は、大部分、親の社会的職業的地位、親の学歴、一家族あたりの収入、居住地（例えば、村落、小都市、大都市）などによって規定されている。」¹⁾そしてこれらの諸変数は、親の激励、子どもの学業成績、通った学校の種類、本人の教育あるいは職業にたいする意欲などの媒介変数を介して影響しているのである²⁾。

こうして、ソビエト社会における学歴達成過程と階層が関連していることが確認されたのである³⁾。

4. 職業の社会的評価

西側社会学の社会階層論において個人の社会的地位を決定する指標としてもっともよく採用されているのは、個人の職業である。社会的地位の他の指標である、個人の所得も職業によって大きく規定されているし、学歴もまた職業との関連が大きい。そして個人の職業が判明すれば、生活様式もまた推測されるのである。

それではある社会における職業のヒエラルキーはどのようになっているのだろうか。収入の多い職業と少ない職業、複雑な内容の職業と単純な内容の職業、国民経済や社会への貢献度の大きい職業とそれほどでもない職業、個人の満足度の高い職業と低い職業、これら様々な次元において職業の序列がつけられるが、社会階層調査で広く採用されているのは職業の社会的評価に基づくランクづけである。アメリカ、日本などでは全国の成人を対象として職業の威信を尋ねて職業のランクづけを行っているが、ソビエトでは主として生徒、学生を対象にして職業の魅力の調査が1960年代中ばからいくつかの地点で行なわれている。学校における職業指導の資料という形で職業の魅力調査が開始されたのはアメリカと同様である。このような限界はあるが、間接的にソビエトにおける職業の社会的評価を知ることができよう。

1966年にニジニ・タギルの中等学校教師を対象に教え子の職業としての好ましさの観

1) 2) Dobson R. B. Social status and inequality of access to higher education in the USSR, in Karabel J., Halsey H. (eds.) Power and Ideology in Education, 1977. 潮木守一、天野郁夫、藤田英典編訳『教育と社会変動(下)』東京大学出版会、1980年、122頁。

3) 当節については以下の文献も参考にした。

Yanowitch M. Social and Economic Inequality in the Soviet Union, London, Martin Robertson, 1977.

Yanowitch M. Schooling and inequalities, in Schapiro L., Godson J. (eds.) The Soviet Worker: Illusion and Realities, London, Macmillan, 1981.

Lane D., O'Dell F. The Soviet Industrial Worker: Social Class, Education and Control, London, Martin Robertson, 1978.

点から30の職業の評価を求めた¹⁾。男子の職業としては、電気機関車機関士、ジャーナリスト、医師、金属技師、BY3教授、鉱山技師、熟練金属労働者、化学技師、掘削機関手、建築技師、熟練化学労働者、幹部士官、工作機械つき熟練労働者、熟練鉱山労働者、熟練建築労働者、運転手、鋳造労働者、自動機械・計測機器労働者、教師、エコノミスト、塗装工、民警、衛生工事仕上げ工、熟練軽工業労働者、理髪師、販売員、熟練食品工業労働者、郵便・電信・電話労働者、給仕、看護人、とランクづけされた。上位に専門家が位置づけられ、ついで熟練労働者がきて、勤務員が最低である。女子については、医師、BY3教授、ジャーナリスト、エコノミスト、教師が上位5職業で、看護婦、郵便・電信・電話労働者、販売員などがこれにつづき、重工業の熟練労働者や男性向け職業は低く評価されていた²⁾。

1975年キエフの10年生についての調査では、物理学者、サイバネティックス学者、医学者、生物学者、医師がベストファイブであり、各種技師がこれに続き、旋盤工、仕上げ工、看護婦、事務員などが中位にランクづけられ、保母、会計係、給仕などが最も低く評価されていた³⁾。

社会人を対象とした唯一の職業威信評価ともいべき調査がコストロマで行われてい

表9 勤労青年の職業威信評価(10点満点)

| | 非熟練労働者 | 熟練労働者 | 勤務員 | 専門家 |
|----------|--------|-------|------|------|
| 医師 | 7.99 | 7.83 | 8.32 | 8.12 |
| 俳優 | 7.23 | 7.79 | 6.86 | 4.16 |
| 中等学校の教師 | 6.72 | 6.53 | 7.18 | 5.72 |
| 物理学者 | 6.71 | 6.79 | 7.50 | 7.33 |
| 作家 | 6.71 | 7.14 | 8.34 | 7.58 |
| 技師 | 6.65 | 6.86 | 6.89 | 7.79 |
| ジャーナリスト | 6.52 | 6.50 | 7.45 | 7.44 |
| 船員 | 6.45 | 6.54 | 6.68 | 6.08 |
| 化学者 | 6.37 | 6.44 | 7.48 | 6.81 |
| 冶金学者 | 6.26 | 6.35 | 7.45 | 5.90 |
| 農業技師 | 5.26 | 5.03 | 4.90 | 4.71 |
| 販売員 | 5.09 | 4.54 | 3.58 | 3.68 |
| トラクター運転手 | 4.93 | 5.09 | 4.87 | 3.64 |
| 織工 | 4.59 | 4.74 | 4.67 | 3.64 |
| 旋盤工 | 4.48 | 5.16 | 4.21 | 4.21 |
| 建築工(石工) | 4.28 | 4.89 | 4.57 | 3.64 |
| 簿記係 | 4.09 | 3.70 | 4.03 | 3.02 |
| 給仕 | 3.65 | 3.39 | 2.78 | 2.66 |

(出所) Шубкин В. Н. (ред.) Трудящаяся молодежь, с. 84-85.

- 1) Руткевич, Филиппов, Указ. соч., с. 232-40.
- 2) 男女のランク間の順位相関係数は-0.081と低く、男女のランクは別だと考えられる。
- 3) Никитенко В. В., Оссовский В. Л. Образование и профориентация молодежи (на примере УССР) в кн: Васильева Э. К. и др. (ред.) Советская молодежь, М. Финансы и Статистика, 1981, с. 42.

ソビエト社会における階級と社会移動

る¹⁾。全体として、医師、作家、技師、物理学者、などの専門家が高く評価され、販売員、簿記係、給仕などの勤務員が低く評価されているのは他の調査と共通の傾向である。また階層ごとに他の階層よりも高くないしは低く評価している職業も目につく。例えば、非熟練労働者は俳優、農業技師、販売員、給仕を高く、物理学者、作家、ジャーナリスト、化学者を低く評価している。熟練労働者はトラクター運転手、旋盤工、建築工を高く、医師、ジャーナリストを低く評価している。勤務員は医師、中等学校の教師、物理学者、作家、ジャーナリスト、船員、化学者、冶金学者、簿記係を高く、販売員、旋盤工を低く評価している。専門家は技師、ジャーナリストは高く評価しているが、これらを除いては他の階層よりも低く評価し全般的に評価が辛くなっている。どうやら各階層とも自分たちの周囲の身近な職業を高く評価する傾向があるようである。

また男女別に職業評価を比較すると、男性では医師、技師、作家、船員、物理学者が上位5職業、農業技師、織工、販売員、簿記係、給仕が下位5職業であった。女性では医師、作家、俳優、中等学校の教師、物理学者が上位5職業、石工、旋盤工、簿記係、塗装工²⁾、給仕が下位5職業であった³⁾。

これまでの調査を通して、ソビエトでは専門家、熟練労働者、勤務員、といった職業評価のランクがみられるといえよう。西側社会ではホワイトカラー（勤務員）の方がブルーカラー（熟練労働者）よりも上位にランクされているが、ソビエトでは逆になっている。その理由として考えられるのは、熟練労働者の方が賃金が高いこと、従来からソビエトでは重工業が重視され、軽工業やサービス業は冷遇されていたことである。サービス業や医師、教師などの職業に女性が多く働いていることも評価を下げる要因となっているのではなかろうか。

つぎに職業の評価はどのような要因から形成されているか検討してみよう。M・ティトマはエストニアの大学3年生に14職業の評価を求め、職業間の相関係数を求め、さらに因子分析をおこなったところ、説明力の大きい因子が2つ見出された。第1因子の説明力は23.3%、第2因子の説明力は14.7%であった⁴⁾。第1因子に関して因子負荷量の大きい職業は、トラクター運転手、農業技師、農事指導員、畜産学者、運転手、建築労働者であり、物質的生産に関する因子といえよう。

第2因子に関して因子負荷量の大きい職業は学者、技師、数学者、法律家、経済学者、医師、創作インテリゲンツィアであったので、精神的活動に関する因子といえる。結局、これら2因子は肉体労働と精神労働という区分に類似している。

さらに職業の特性の好ましさの評価を検討してみよう。ティトマは職業の評価を規定していると考えられる10特性を取上げてエストニアの学生に評価させた。その特性とは、創造性、自己確立、自己完成、社会への有用性、国民経済への有用性、物質的報酬、親友

1) Шубкин В. Н. (ред.) Трудящаяся молодежь: образование, профессия, мобильность, М. Наука, 1984, с. 84-85.

2) 表9の職業の他にこの職業がつけ加えられて19職業が評価された。また男女のランク間の順位相関係数は.792であり、かなり関連がある。ニジニ・タギルの場合と比べてとくに男性向きの職業、女性向きの職業と区別できない職業が多く評価の対象とされたためであろう。

3) Там же, с. 88.

4) Титма М. Х. Выбор профессии как социальная проблема, М. Мысль, 1975, с. 141-158.

の人気、将来の保証、社会的地位、人びとの指導、である。学生がとくに重要と評価した特性は、自己完成、自己確立、社会への有用性であり、ついで物質的報酬、創造性が来て、人びとの指導、社会的地位は重視されていない。概して個人の能力が発揮できることが重視され、社会的地位は重視されていない。これらの特性の間の相関係数を因子分析したところ、説明力の大きい3因子が見出された。第1因子の説明力は11.6%、第2因子のそれは8.4%、第3因子のそれは7.7%であった¹⁾。

第1因子に関して因子負荷量の大きい特性は物質的報酬、将来の保証、親友の人気、社会における位置であり、社会的地位に関する因子といえよう。

第2因子に関しては自己完成、自己確立の因子負荷量が大きく、職業活動における自己表現に関する因子といえよう。

第3因子に関しては国民経済への有用性、社会への有用性の因子負荷量が大きく、職業の社会的意義の因子といえよう²⁾。

ロシア共和国の学生を対象に職業の意義の評価を尋ねて同様の手法で処理したところ、社会的地位に関する因子、社会的意義に関する因子、自己表現に関する因子の3因子が見出された³⁾ので、ソビエトの若者が職業の意義として考慮するのはこれらの側面であろう。

このような側面において高く評価される特性をもっている職業といえば、専門家の職業であり、単純な肉体労働の職業は大して意義が認められない。しかし、ソビエトの国民経済の職業構造においては単純な肉体労働の職業の方が専門家の職業よりもはるかに多いのである。職業の社会的評価による理想的な職業構造と現実のそれとは食違っていることがしばしば指摘されており⁴⁾、学校における職業指導だけではその開きを埋められない。専門家の職業を目指す競争が高等教育の機会をめぐる競争という形で現われていることはすでにみたとおりである。

5. 社会移動

西側の社会学者は、「社会移動」を、「個人が社会のなかのある位置から別の位置に動く過程—それぞれの位置には一般的合意にもとづいて、一定の上下的な評価が与えられている—」⁵⁾とか「社会的地位体系間での人間の動き」⁶⁾と定義している。そして社会移動の種類として、垂直的移動（個人の地位の変化を伴う移動で、上昇移動と下降移動がある）と水平的移動（個人の地位の変化を生じない移動で、昇進・左遷を伴わない企業内の異動や移住など）とを分けて、前者に研究の重点をおいてきた。また世代間移動（例えば、父親

1) Там же, с. 171-184.

2) Там же, с. 185.

3) Руткевич М. Н., Титма М. Х., Филиппов Ф. Р. Изменения в социальном составе и профессиональной ориентации студенчества в СССР, в кн: Рябушкин Т. В., Осипов Г. В. и др. (ред.) Советская социология, т. II. М. Наука, 1982, с. 133.

4) Арутюнян, Социальная структура..., с. 238-39. Шубкин (ред.) Указ. соч., с. 43-44.

5) Lipset S. M., Bendix R. Social Mobility in Industrial Society, 1959. 鈴木広訳『産業社会の構造：社会的移動の比較分析』サイマル出版会, 1969年, 2頁。

6) 富永健一「社会階層と社会移動へのアプローチ」(同編『日本の階層構造』東京大学出版会, 1979年所収) 4頁。

ソビエト社会における階級と社会移動

とその子との間の地位の変化)と世代内移動(個人の生涯における地位の変化, 例えば, 職業経歴の変化)とを分けている。

既に述べたように西側の社会学者は類似した社会的地位の人びとを一括してある社会階層と呼んでいるので, 社会階層の間での人間の動きを社会移動と考えてもよい。実際, 「社会移動」は「社会階層」と同時に用いられることが多かった。そこでソビエトの社会学者は社会階層論とともに社会移動論にたいする批判をくり広げた。ソビエトの社会学者が「社会移動」という述語を使用したのは1970年が最初であった。

ソビエトの社会学者による西側社会学者の社会移動論にたいする批判はつぎのような点にある¹⁾。

(1) 社会移動を階級構造と切り離して考察している。社会構造と階級関係の客観的本質を歪めて, 結果的に現状維持の傾向をみせる。

(2) 社会的区分(階層)の基準が恣意的である。

(3) 職業移動を社会移動と同一視して, 階層と職業構造の分析を階級構造の分析にすりかえている。

(4) 体制に関係なく, 数量的な移動指数を用いる。

それでもソビエトの社会学者は社会移動論の発想そのものは否定しなかった。「上下の階級, 階層という概念は原則的にソビエト社会主義社会にあてはまらない。ソ連には上の階級, 階層も下の階級, 階層も存在しない。私たちの社会に実在する社会階級や集団から他のそれらへ移動する可能性, 中でも労働者と農民からインテリゲンツィアへ, はどの資本主義国よりも大きい。」²⁾社会主義社会では階級間の移動の障害が小さくなり, 「社会移動の増加は私たちの社会が完全なる社会的等質性へ前進していることの重要な指標の一つである」³⁾とか, 「発達した社会主義の条件のもとで社会移動は新しい方向と傾向をもつ」⁴⁾とか肯定的に評価されて, 社会移動の研究は積極的に進められている⁵⁾。

この「社会移動」の用語としては *социальные перемещения*, *социальная мобильность*, *социальная подвижность* などが用いられていて統一されていないが, 『応用社会学辞典』の解説によると, *социальные перемещения* はもっとも広い意味で個人の地位や場所の変化をさす。この中には, 社会階級的地位の変化 (*социальная мобильность*), 居住地の社会的空間的变化 (*миграция*), 労働集団や産業において占める位置の変化 (*движение и текучесть кадров*), がある⁶⁾。

つぎにソビエト社会における社会移動の状況を検討していくが, 若干の問題点がある。

- 1) Мокляк Н. Н. Социально-профессиональные перемещения на социалистической предприятии, Киев, Наукова думка, 1977, с. 34-35.
- 2) Руткевич М. Н. Изменение социальной структуры советского общества и интеллигенция, в Осипов Г. В. (ред.) Социология в СССР, т. I. М. Мысль, 1965, с. 408.
- 3) Филиппов и др. (ред.) Указ. соч., с. 13.
- 4) Филиппов Ф. Р. Социальные перемещения в советском обществе, Социологические Исследования, 1975, №. 4. с. 14.
- 5) ただし, 社会移動と階級とは別の現象であり, 社会移動が甚しくても階級は消滅しないという R・ダーレンドルフの指摘は無視されている。前掲書, 149-50頁を参照のこと。
- 6) Давидюк Г. П. и др. (ред.) Словарь прикладной социологии, Минск, Университетское, 1984, с. 198.

第一は、資料の不足である。全国的規模の移動調査も職業の社会的威信調査もない。したがって、いくつかの地点における断片的資料に頼らざるをえない。第二は、ソビエトの社会学者は上昇移動や下降移動に言及しない。階級や階層の上下について公けに論じられることは殆んどない¹⁾。だが、賃金、学歴、職業の好ましきなどから判断すると、労働者、勤務員、コルホーズ農民から専門家への移動は上昇移動、逆の移動は下降移動と考えられる。労働者から勤務員への移動、ないしは勤務員から労働者への移動はいずれか判定し難い。コルホーズ農民から労働者、勤務員への移動は上昇移動と考えられる。

世代間移動の状況についてはオリョールで調査されている。祖父、父、本人の三世代にわたる階級構成の変化を概観してみると、労働者とインテリゲンツィアの増加、農民の減少の傾向が認められた。とくに農民は都市住民の過半数から実質的消滅まで減少していたし、農村でも9割強から3分の2まで減少していた。インテリゲンツィアは都市では7.0%から44.9%へ、農村では0.6%から12.6%へ増加していた。労働者も都市では27.5%から47.7%へ、農村では2.5%から12.9%へ増加していた²⁾。要するにソビエト市民は三世代間に急激な階級構成の変化を経験したわけであり、革命や工業化、都市化がこの変化の背景にあることは言う迄もない。

父親と本人との間の世代間移動の状況をみると、親子が同じ階級的地位を占めている世襲率は労働者、専門家(大学卒)、技術労働者が高く、勤務員、コルホーズ農民は低い。そして技術労働者、専門家(大学卒)、専門家(中等専門卒)を一括して専門家とすれば、専門家としての世襲率は技術労働者で0.81、専門家(大学卒)で0.83、専門家(中等専門卒)で0.78とかなり高い。また専門家から他階層への下降移動率は技術労働者で0.19、専門家(大学卒)で0.17、専門家(中等専門卒)で0.22となる。他階層から専門家への上昇移動率は労働者で0.38、コルホーズ農民で0.35、勤務員で0.58である。これらの数字から専門家の自己再生産の傾向が著しいといえよう。これ以外に目につくのは、コルホーズ農民から労働者へ、勤務員から労働者への移動である。

世代間移動に関するもう一つの資料はマグニトゴルスクの勤労者の初職時の地位と父親

表 10 世代間移動 (1)

| 出身 | 地位 | 労働者 | コルホーズ農民 | 技術労働者 | 専門家(大卒) | 専門家(中専卒) | 勤務員 | 合計 |
|------------|----|------|---------|-------|---------|----------|------|------|
| 労働者 | | 0.57 | 0.02 | 0.11 | 0.11 | 0.16 | 0.06 | 1.00 |
| コルホーズ農民 | | 0.57 | 0.14 | 0.08 | 0.08 | 0.19 | 0.08 | 1.00 |
| 技術労働者 | | 0.07 | - | 0.47 | 0.16 | 0.18 | 0.12 | 1.00 |
| 専門家(大学卒) | | 0.12 | - | 0.18 | 0.54 | 0.11 | 0.05 | 1.00 |
| 専門家(中等専門卒) | | 0.16 | - | 0.16 | 0.31 | 0.31 | 0.06 | 1.00 |
| 勤務員 | | 0.24 | - | 0.09 | 0.24 | 0.25 | 0.16 | 1.00 |

(注) 合計が1.00と一致しない階層があるが、原表のまま示しておいた。

(出所) Спиридонов Л. И., Гишинский Я. И. (ред.) Указ. соч., с. 187.

1) Н. Айтфは「労働者階級のなかの階層間の社会移動については社会的ヒエラルキーの階段に沿って『上昇』『下降』移動をはっきりと語りうる」という。Аитов Н. А. Динамика социальных перемещений в СССР, в кн: Рябушкин Т. В., Осипов Г. В. и др. (ед.) с. 202.

2) Спиридонов, Гишинский (ред.) Указ. соч., с. 173.

ソビエト社会における階級と社会移動

表 11 世 代 間 移 動 (2) (%)

| 親の地位 | 子の地位 | 労働者 | インテリゲンツィア | 勤務員 | コルホーズ農民 | 合計 |
|------|-----------|------|-----------|------|---------|-------|
| 労働者 | 労働者 | 72.7 | 15.4 | 9.4 | 1.5 | 100.0 |
| 労働者 | インテリゲンツィア | 43.5 | 45.0 | 8.8 | 2.7 | 100.0 |
| 労働者 | 勤務員 | 56.8 | 22.1 | 16.0 | 5.1 | 100.0 |
| 労働者 | コルホーズ農民 | 55.0 | 12.4 | 7.3 | 15.3 | 100.0 |

(出所) Аитов Н. А. Указ. соч., с. 200.

のそれとを対比したものである¹⁾。ここでは労働者の世襲率をもっとも高く、インテリゲンツィア、勤務員、コルホーズ農民と下っている。インテリゲンツィアの下降移動率は0.55と高く、インテリゲンツィアへの上昇移動率は労働者で0.15、勤務員で0.22、コルホーズ農民で0.12となる。コルホーズ農民から労働者への移動の多いことと勤務員がもっとも上昇移動率の高いことはオリョールと共通の傾向であるが、マグニトゴルスクの方が下降移動が多く、上昇移動が少ない。これは両市の産業、職業構造や歴史的性格の相違などによるのであろう。これら二市の世代間移動の状況のうちいずれがソビエトの典型的状況かは断言できない。

西側の社会移動の研究で広く採用されているパス解析 (path analysis) の手法を用いた研究がソビエトでも出現したので取り上げてみよう。図2に示したパス・モデルは本人の現在の職業的地位を本人の学歴と最初の職業的地位、父親の学歴、職業的地位、の4つの変数を用いて説明しようとする。父の職業は子の学歴ないしは初職を経由して、あるいは直接子の現職に影響する。父の学歴は子の学歴を経由して直接あるいは初職を経由して子の現職に影響する。1967年のカザンの調査データからパス係数を求めたところ、学歴は父の学歴と職業とによってかなり規定されていることがわかった。学歴達成機会は階層に関係なく開かれているとはいえない。この学歴が初職を規定しているが、父の職業は殆んど規定力をもたない。現職の規定要因として重要なのは学歴と初職であり、父の職業の規定力はない。この分析結果から、ソビエトの職業達成過程には、父の学歴→学歴→現職ないしは父の学歴→学歴→初職→現職の経路に沿った影響関係があるといえる。資料の代表性

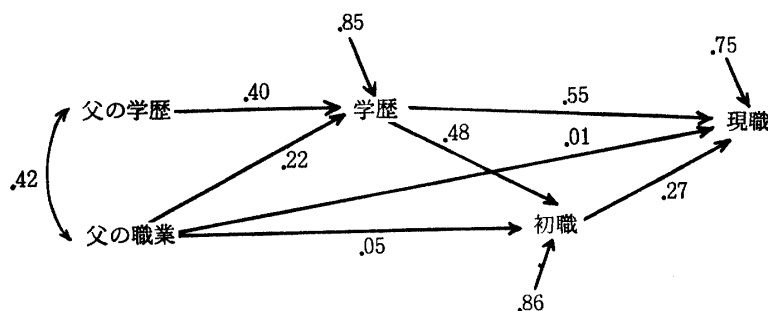


図 2 世代間移動のパス・モデル

(出所) Шкаратан О. И., Рукавишников В. О. Социальная структура населения советского города и тенденции ее развития, Социологические Исследования, 1974. №. 2. с. 47-48.

1) Аитов, Указ. соч., с. 200. なお表 11 でも合計が 100%に一致しない階層があるが、原表のまま示しておいた。

に問題があるので留保条件つきであるが、ソビエトもまた「学歴社会」であるといえよう。

父の職業の子の職業にたいする影響力は小さいが、父の学歴と子の学歴は関連がみられ、子の学歴が初職と現職を規定している。日本の調査では父の学歴→子の学歴→初職→現職といった関連が見出され、学歴と終身雇用制度との結びつきが想定されたが、ソビエトでは学歴→現職の関連が強く、学歴の効果は職業経歴の初期段階以後も続いている。

つぎにソビエトにおける世代内移動を考察するが、世代内移動について上昇移動や下降移動を論ずる場合、初職と現職とが比較されるのであるが、両者の時間的間隔のとり方で変動が大きく世代間移動よりも研究が難しい。さらにソビエトの場合、この主題についても断片的資料に頼らざるをえないのが現状である。

前出のマグニトゴルスク調査では、1950年と1976年における地位の変化を取上げている。26年間の地位の持続率はインテリゲンツィアで85.7%、労働者で80.5%と高かったが、勤務員では46.2%へ低下し、コルホーズ農民は消滅していた。コルホーズ農民は75.6%が労働者へ、19.0%が勤務員へ移動していた。また勤務員からはインテリゲンツィアと労働者へ26%前後が移動していた。労働者からインテリゲンツィアへの移動は13.1%であった²⁾。勤務員とコルホーズ農民の移動率が高いことは世代間移動と同様であるが、インテリゲンツィアは世代間移動では下降移動が大きかったのにたいして世代内移動では地位の持続率は高い。世代により移動状況が異なっていると考えられる。

エストニアの中等学校の卒業者を31歳まで追跡して階層間の移動状況をまとめた結果によると³⁾、ある階層から他の階層への流出率は専門家(大学卒)と専門家(中等専門卒)

表12 社会移動の確率

| 流入階層 \ 流出階層 | コソ ルホ ーズ 農 働 者 | 非 熟 練 農 働 者 | 熟 練 農 働 者 | 高 度 熟 練 農 働 者 | 勤 務 員 | 専 門 家 (実 務 家) | 専 門 家 (中 等 専 門 卒) | 専 門 家 (大 学 卒) |
|--|-------------------------------|----------------------------|-----------------------|---------------------------------|-------------|--------------------------------------|--|--------------------------------------|
| コソ ルホ ーズ 農 働 者 | 0.67 | 0.01 | 0.07 | 0.01 | 0.07 | 0.08 | 0.05 | 0.04 |
| 非 熟 練 農 働 者 | 0.03 | 0.18 | 0.26 | 0.20 | 0.11 | 0.12 | 0.03 | 0.07 |
| 熟 練 農 働 者 | 0.06 | 0.01 | 0.49 | 0.17 | 0.09 | 0.08 | 0.03 | 0.07 |
| 高 度 熟 練 農 働 者 | 0.02 | 0.00 | 0.02 | 0.67 | 0.07 | 0.12 | 0.04 | 0.06 |
| 勤 務 員 | 0.02 | 0.02 | 0.04 | 0.03 | 0.57 | 0.11 | 0.08 | 0.13 |
| 専 門 家 (実 務 家) | 0.00 | 0.01 | 0.02 | 0.02 | 0.04 | 0.54 | 0.11 | 0.26 |
| 専 門 家 (中 等 専 門 卒) | 0.01 | 0.02 | 0.04 | 0.01 | 0.02 | 0.01 | 0.82 | 0.07 |
| 専 門 家 (大 学 卒) | 0.00 | 0.00 | 0.01 | 0.00 | 0.01 | 0.00 | 0.00 | 0.98 |

(出所) Кенкманн П. О., Саар Э. А., Титма М. Х. Социальное самоопределение..., с. 92.

1) 藤田英典「社会的地位形成過程における教育の役割」(富永健一編, 前掲書所収) 334-35頁。

2) Айтов, Указ. соч., с. 204.

3) Кенкманн П. О., Саар Э. А., Титма М. Х. Социальное самоопределение поколений (Исследование когорты с 1948 по 1979 г., Эстонская ССР) в кн: Рябушкин Т. В., Осипов Г. В. и др. (ред.) Указ. соч., т. II, М. Наука. с. 92.

ソビエト社会における階級と社会移動

が低く、非熟練労働者がもっとも高くなっていた。高度熟練労働者とコルホーズ農民・ソフホーズ労働者の流出率は3分の1であった。熟練労働者、専門家（実務家）、勤務員はほぼ半分が流出していた。流出階層と流入階層との関連で移動の方向を探ってみると、非熟練労働者から熟練労働者、高度熟練労働者、勤務員、専門家（実務家）へ、熟練労働者から高度熟練労働者へ、高度熟練労働者から専門家（実務家）へ、勤務員から専門家（実務家）、専門家（大学卒）へ、専門家（実務家）から専門家（中等専門卒）、専門家（大学卒）へ、といった移動が目についた。若者たちは全般的に地位を上昇させていた。

この他に世代内移動については、専門家の出身階層に関する資料がある。ウラルの各種工場の専門家には労働者出身者がもっとも多く、勤務員出身者、コルホーズ農民出身者と続き、専門家出身者は少なかった¹⁾。またモスクワとボロネジで若手専門家の出身階層を調べたが、工場の技術労働者（ИТР）では労働者出身者が3分の1を上回っていたが、設計・工芸専門家では3割を下回り、科学・調査研究所の専門家では専門家出身者が過半数を占め、科学アカデミーの研究所の専門家では実に7割が専門家出身者であった²⁾。労働者出身者は工場内で徐々に昇進して技術労働者や設計者などになれるが、高等教育の要求される科学者には ВУЗ 入学試験の厳しさのためなかなか入れないといえよう。

6. 結びにかえて

本稿はソビエトで行われた具体的社会学的調査の資料に依拠しつつ、ソビエト社会における階級と社会移動の状況について検討してきた。その結果を総括すれば、ソビエト連邦の憲法や一部の社会学者の主張するような、階級間の差異の解消や社会的等質性の増大がみられるというよりも、階級、階層による差異は依然として大きく、無階級社会の実現はほど遠いといわざるをえない。

より詳細にみていこう。ソビエト社会は労働者、コルホーズ農民、インテリゲンツィアの階級、階層から構成され、賃金・学歴水準や生活様式が接近しつつあるという主張も、若干の指標において階級内格差が目立ち、より多くの階層の存在を認めた方が階級の実態の分析に有効だと思われる。またソビエト社会でも個人の帰属階層の決定に重要な要因として学歴が認められた。そして個人の学歴達成機会は階層によって異なっていることも確認された。すなわち、インテリゲンツィアの子弟が ВУЗ に入学する機会は労働者、コルホーズ農民の子弟のそれよりもはるかに大きい。またソビエトが学歴社会であることを示唆する研究もある。職業の社会的評価においては、インテリゲンツィアの職業がもっとも高く、単純な肉体労働の職業が低く評価されている。インテリゲンツィアの職業への就業機会は限られており、インテリゲンツィアの職業の要件である ВУЗ 入学競争は激しい。そして社会移動の状況をみると、世代間移動、世代内移動ともにインテリゲンツィアの自己再生産の傾向が生じつつあるように思われる。これはまた労働者、勤務員、コルホーズ農民にとって上昇移動の機会が小さくなること、インテリゲンツィアが有利な地位を保とうとする努力を強めること、を意味する。

1) Руткевич, Филиппов, Указ. соч., с. 163.

2) Руткевич, Филиппов (ред.) Указ. соч., с. 251.

このような現代ソビエト社会の状況から判断すると、無階級社会の実現は覚束ないと思われる。また学歴の差異、さらには労働の性質の相違、すなわち分業が存在する限り、将来も階層は形成されるであろう。

本稿では殆んど言及できなかったが、ソビエト社会には、民族による、地域による、性による差異が存在しており¹⁾、これらを含めた社会的不平等の解消は容易でないと思れわる。旧来多くの人びとの理想であった、平等な人間によってつくられる平等な社会の実現は、社会主義社会においても前途遼遠である。

Class and Social Mobility in Soviet Society

Yoshitomo WATANABE

The Russian Revolution that occurred in 1917 had some goals. One of them is to build a socialist society that is more egalitarian than capitalist ones. Has the goal been accomplished? To this question, some answer affirmatively and the others answer negatively. The former says that after the revolution the private ownership of the means of production was abolished and the agricultural production was collectivized, so there is no exploitative relationship between classes and no privileged groups. On the other side, in Soviet society social welfare and public service were completed and the difference between town and village was lessened. Taking these situations into consideration, Soviet society is more egalitarian than capitalist ones.

The latter refuses those assertions. They also admit that in Soviet society old privileged groups and elites were abolished but they assert that during construction of the socialist society new privileged groups and elites have appeared. For example, the New Class (M. Djilas), Nomenklatura (M. Voslensky), elite (M. Matthews), controls the means of production and enjoys privilege in many areas of Soviet life. Soviet society is far from an egalitarian society.

In this article using the empirical data obtained by the Soviet sociologists, I attempt to decide which is better explanation of the class structure of Soviet society.

According to the constitution of the Soviet union and the official statistics, there are two classes, namely workers and peasantry, and one stratum, intelligentsia or white collar workers. The constitution declares that the relationship among them is

1) 例えば, Sacks M. P. *Work and Equality in Soviet Society: The Division of Labor by Age, Gender, and Nationality*, N. Y. Praeger, 1982. を参照。

〔付記〕 本稿はスラブ研究センター1985年度第1回研究報告会「過渡期にたつ現代ソ連: その総合的研究」における報告に加筆したものである。当日、貴重なコメントを戴きました、北大文学部金子勇氏ほかご参加の先生方に感謝申し上げます。

cooperative and social differences among them have been lessened, in the future, Soviet society will become a classless society. But some Soviet sociologists find that in addition to the difference between classes, there are difference within a class. They also find many strata within a class and assert that the nature of the individual's work and his educational level are important factors of stratification.

Consequently, first of all, I paid attention to the importance of education in Soviet society, and I analysed the relationship between class, stratum and the opportunity to attend the higher education. The results were as follows; after completion of the eighth grade the pupil must select his course, and both career plan and its realization were influenced by his class positions. Children of the intelligentsia was better prepared for the entrance examination of the VUZ (university, institute) than those of manual workers and white collar workers. But children of peasantry was in the most inferior conditions owing to the lower educational quality of the secondary school in the rural area. And the use of private tutors is widespread among youth from urban well-to-do families. Recently some elite schools appeared in larger cities and they were occupied by the intelligentsia's children. Some critical remarks against elitism in education were raised, but generally the economic power of the family, the parent's level of education, the aspirations of the parents and pupils, and some facilities accessible to the limited range of pupil made academic performance different.

Then I reviewed results of the research on the social prestige of the occupations. Among Soviet youth, the rank was clear. The most popular occupations were scientists, professors, physicians, engineers, and journalists, and most unpopular were waiters, shop clerks and public service workers. At the top of the hierarchy were placed the occupations of the intelligentsia, then came those of skilled workers and followed those of white collar workers and peasantry. Contrary to the official doctrine, the occupation of the proletariat was not desired and Soviet youth want to get professional occupations.

Social mobility in the USSR was also investigated. When some Soviet sociologists tried to rank stratum hierarchically and then to consider upward and downward mobility, some ideological objections were raised. According to the sociological studies, a great deal of upward mobility had occurred during industrialization and urbanization in Soviet society. But recent trend in intergenerational mobility indicates some tendency of self-recruitment of the intelligentsia. This tendency is also found in intragenerational mobility. And through path analysis some Soviet sociologists confirmed that the educational level of the father influenced his children's educational and occupational attainment. So the educational attainment process in Soviet society is in some aspects similar to that of Western societies.

渡 辺 良 智

My conclusions are as follows; Soviet society is not an egalitarian society, classes and strata of Soviet society have much influences on the Soviet citizen's life chances, among others the educational level of the individual is the most important factor of deciding one's class position, and it seems that building a classless society is rather difficult goal.